

出島図及び尾張国安食莊絵図模写記録

村 岡 ゆかり

模写を行なうことは、ただ単に原本の印象・色・筆使い等を正確に写すということだけでなく、原本の諸情報を周到に読み、判断した結果として可能になるのである。もちろん模写には、原本の変色・褪色の状態や、変化する前の彩色はどのようなものであったかについての手掛かりと、それをどのように推定することができたかなどの諸情報や判断が盛り込まれているのだが、それは結果であり、そうした情報や判断が明示的に示されているわけではない。それらは通常、模写製作者の記憶のなかに留まるだけなのである。

しかし、模写本の制作は原本のもっとも綿密な観察と判断に支えられているため、そうした模本制作者の原本観察の結果を記述しておくことは、今後の原本研究に必ず必要となるに違いない。そして、原本は絶えず変化しており、その修理や観察を行なうときに、模写制作時の記録はおおいに参考になるのではないだろうか。また、この変化は原本だけでなく、模本についても同様に起こってくるのである。とくに、模本は原本に準じた材料を使って制作しているとはいえず、現代の和紙や絵の具は、原本の作られた時代における材料とその製法の記録が僅かしか残さされていないことや、その時代にあった材料で現代には最早ないものがあることなどから、まったく同じ材料を使用することは不可能といえる。このため、歳月の経過によって起こる模写の変化は未知数なのである。

以上のことから、模本を制作した時点での原本の観察結果や材料・技法についての記録を残しておくことは、現時点だけでなく、後世にとっても重要であると感じたのである。当面は、不十分な記述にとどまるどころも多いが、今後ともに記録を残していきたいと思っている。

一、出島図(紙本著色)

《原本》

中村英勝氏所蔵

絹本著色

軸装

《作業手順》

罌水引きポリエステルフィルムを原本の上に敷き、その上から紙による上げ写し↓裏打ち↓仮張りに貼る↓彩色↓墨の線を描き起こす↓仕上げ

《材料》

- ・紙：薄美濃紙(性質についてはデータ不足である)
- ・顔料：墨・胡粉・コチニール※・緑青・藍・辰砂・岱楮・群青
- ・接着剤：三千本膠
- ・罌水：三千本膠+明礬
- ・ポリエステルフィルム(中性の性質であり、透明なフィルムであ

る)

《彩色》

画面全体に黄土・岱赭等の混色で下地をほどこし、建物はそれぞれ胡粉・胡粉+コチニール※・藍の具(藍+胡粉)を塗り、上から線を描いた。樹木は葉には緑青(白+十三番)、上に胡粉で線描と群青(十三番)を塗った。幹は岱赭+墨。花畑は藍で線描、花は辰砂、上から薄く藍をかけた。石垣は具墨(胡粉+墨)に墨の線描、壁は胡粉、瓦は藍。旗は胡粉地に辰砂、胡粉、藍の順で彩色を行なった。原本は模写であるが、古色の具合が強く、作業では色のトーンを落とすため彩色の後に染料(矢車)、焼白緑の上澄みを引いたが、明るさは残ってしまった。また、紙で絹本の質感を出すことに苦勞しそれを十分に表現できたとはいえない。

尚、この模本は、未丁装・未入架である。

※コチニールに関しては当時、生臘脂が使用されていたとも考えられる。

二、尾張国安食荘絵図(紙本著色)

《原本》

醍醐寺所蔵(第一三四函一八一八)

紙本著色

裏打ちあり

中央部分の他に継目が見当たらないことから、二枚の細長い紙を継いでいるように思われる。

《作業手順》

礬水引きポリエステルフィルムを原本の上に敷き、その上で紙による上げ写し↓裏打ち↓仮張りに貼る↓墨の線を書き起こす↓彩色↑仕上げ

《材料》

- ・紙：白麻紙(性質についてはデータ不足である)
- ・顔料：墨・藍・藤黄・岱赭
- ・接着剤：三千本膠
- ・礬水：三千本膠+明礬
- ・ポリエステルフィルム

《彩色》

下地に染料(矢車)・焼き白緑の上澄みを用いて古色を出した。原本を観察すると、樹木に関しては、幹を描いたのち、少し薄めの墨で葉を描き、上から濃い墨で仕上げ、その上に草の汁(藍+藤黄)をかけたと思われるので、その作業手順に近ずけた。彩色は、葉は墨・薄墨・草の汁(藍+藤黄)。幹は岱赭に少し墨を混ぜたものを塗った。道は変色のためか当時何色を使用していたのかは不明であるが、(おそらくは丹が使用されていたのではないかと思われる)岱赭+墨を描き、しみは岱赭・焼白緑・焼白群の上澄みを混ぜたものを塗った。

三、尾張国安食荘絵図(ポリエステルトレーシングフィルムに墨描き)

模写は、原本の全体の印象も捉えるため、細かい虫食い・しみ等は整理して描かれることが多い。しかし、原本の情報は、紙の上に描かれた線や彩色だけでなく、虫食い・しみ・折り目にも入っているのである。研究者とこれらの情報を強調する手法はないかと考え、その結果、ポリエステルトレーシングフィルムに墨描きをするという方法を行なうことにした。このポリエステルトレーシングフィルムは、中性の性質を備え、原本に対しての悪影響はないといえる。形状は、不透明なフィルムで、片面に加工がしてあり、墨が乗るようになっている。しかし、保存性に関しては、データが不足してお

り未知数である。

《作業手順》

ポリエステルトレーシングフィルムを原本の上に敷き、そのフィルムに虫食い・しみ・折り目等を墨で濃く記録した。

《材料》

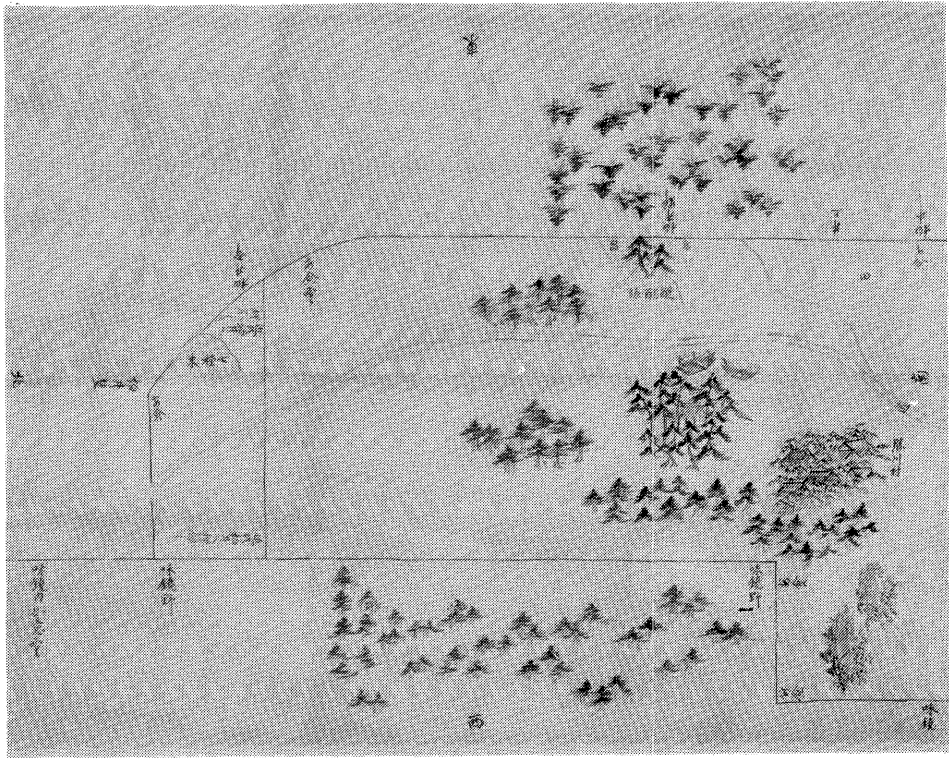
ポリエステルトレーシングフィルム

墨

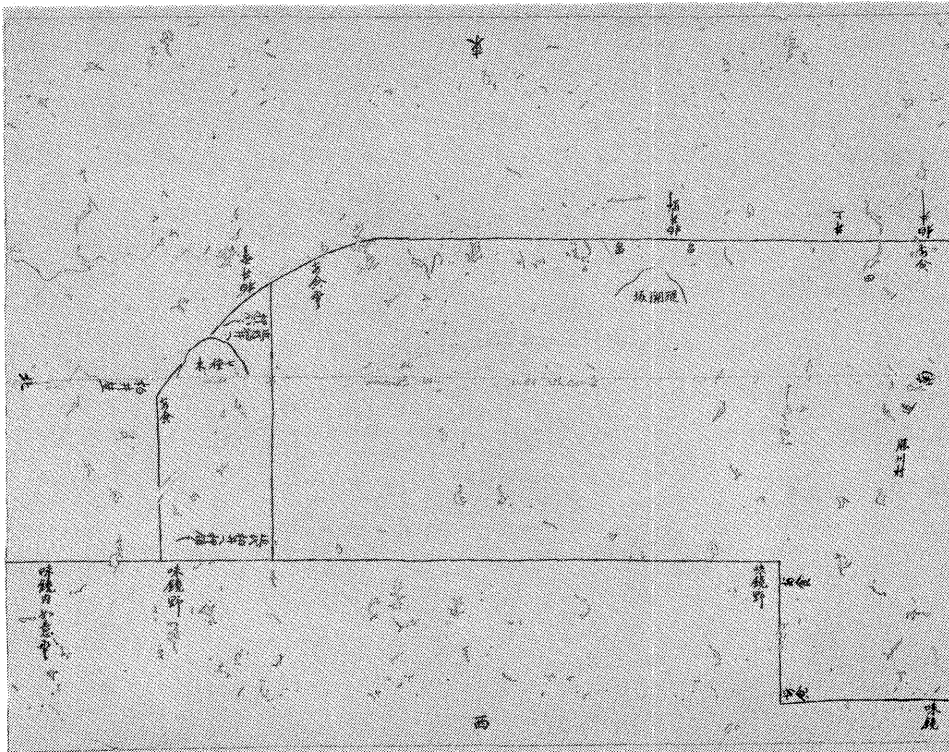
次頁に横写(写真A)ポリエステルトレーシングフィルムに墨描き(写真B)を示した。写真A・写真Bをそれぞれ比較すると、虫食い・しみ・折り目の位置・形が明確に見えてくる。その結果、ポリエステルトレーシングフィルムをコピーにとり、位置を観察し、実際に折り合わせていくことで、折り畳まれていた状態をある程度推測することができたのである。

折り畳まれていた状態については、絵図を研究している方々が正確な判断をすると思うが、この、虫食い・しみ・折り目のみを描く作業が貴重な資料になることは間違いなく、今後も続けていくべきだといえよう。

尚、二・三の模本に関しては、未丁装・未入架である。



【写真A】



【写真B】